

この小さな美しい聖堂

垣内純子

奨励者紹介[かきうち・じゅんこ]

YMCA学院高等学校公民科非常勤講師

アサンプション国際中学校・高等学校宗教科非常勤講師

従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです。

(ローマの信徒への手紙 6章12—14節)

単位制通信高校

私は非常勤講師として現在、2つの私立学校で働いています。今日は総合学科の単位制通信高校であるYMCA学院高校での話をしたいと思います。

総合学科とは、いわゆる普通科で学ぶ5教科などの普通教育と、たとえばエコロジーや福祉、情報などに特化した専門教育の2種類の教育のどちらに属する科目からも選択して履修し、進路や興味に従って能力を身につけることができる課程です。私は前期で公民科の授業を持ちましたが、後期では人権の授業も担当する予定です。今、「後期」と言いましたが、前期・後期で履修する科目が異なります。単位制とは、必修科目もあるものの、基本的には自分が学習したい科目を自由に選び、単位を修得するシステムです。また、学年や留年がないので、自分のペースで学習することができます。通信制とは、教科によって指定されたレポート数枚を自宅で完成させて提出し、かつスクーリングと呼ばれる授業に出席するシステムです。公民科を例に取れば、レポートは全6枚が合格し、8回のスクーリング中、2回出席すれば試験を受ける資格が与えられます。そして、その後の試験に合格すれば単位が認められます。全日制普通科の人には楽な学校と思われるかもしれませんが、生徒たちは高校をドロップアウトして転学してきた人や、今まで不登校を経験し、新たな気持ちで入学してきた人たちなので、まずは勉強することに慣れる時間が必要です。また基礎学力が定着していない場合も多いので、突然高校課程を学ぶことが難しい場合もあります。

単位制通信学校で私が働く理由

私は昨年度からここで働いていますが、長年、単位制通信学校で働きたいと思っていました。理由は三つあります。

一つ目の理由は私自身、学校が大嫌いでした。特に行事が大嫌いでした。行事が子どもじみていて面白くありませんでした。行事がなくなって欲しいので雨が降らないかと願うほどでした。授業の方がましな

のですが、中・高校生時代をすごしたキリスト教主義の学校には、痼癩を起す先生が数人おられました。授業をしないで教室を出て行かれたり、入ってくるなり教科書を教壇にたたきつけたり、生徒全員に丸椅子の上での正座を強制したりで、怒られている理由が分からない。また、中・高時代は毎年相次いで大病し、登校できない私を全く理解してくれない教師たちにうんざりしました。そんな教師たちはキリスト教信者であることを公言されていたので、私は教師にもキリスト教信者にも絶対ならないと心に誓ったほどです。

ところが皮肉なことに、私はその両方共になってしまいました。ある学校で頼まれて教えることになった時、教師以外の仕事もして社会との接触をもつ方がよいと考え、非常勤講師の道を選びました。また、元々教えていた教科が宗教科だったこともあり、働く学校はキリスト教主義学校ばかりです。明確にキリスト教理念を打ち出し、それと知って集まった生徒たちだと思いたいのですが、毎年数人、不登校気味の生徒や退学していく生徒がいます。ある学校では鬱になる生徒が続出したこともあります。そういう生徒に対して学校は結構冷たいです。特に昨今は「通信制の学校に移ったら」と平気で言います。もちろん、体調等を考慮してその方がよいという考えもあるでしょう。しかし、私には「面倒な生徒はうちには要らない」と聞こえるのです。せっかく選んでその学校に来た生徒をこうも簡単に放り出す現状に腹が立ち、私は追い出した生徒たちを追いかけていきたいと思ったのが通信制学校で働き始めた二つ目の理由です。

三つ目の理由は教師生活をスタートした1年目の生徒が「他の教科も教えて欲しい」と言いに来たことをきっかけに通信制で社会科の教員免許を取ったことです。私も通信制で学んだ経験があったのです。

YMCAには勉強はしたくないが高校卒業資格は欲しいという生徒も確かにいます。けれど今までの学校で上手いかず、再起をかけてやってきた人が多いような気がします。おとなしくてまじめで、逆にこんな生徒が全日制の学校にいてくれたら、クラスの緩衝材的な存在になってくれそうです。KYという言葉がはやりましたが、空気が読めないどころか読みすぎて気を使いすぎて疲れるタイプと言うべきでしょうか。こういう若者が社会で活躍してくれたらどれだけ優しい世の中になるだろうかと思います。もちろん、この学校に辿り着くまでにはご家庭の中で大きな葛藤やバトルもあったことでしょう。保護者の方も大きな決断をされたことに頭が下がります。

生徒たちの様子

今年度はそんな生徒の中でも他人とのかかわりが苦手だと感じている生徒たちのクラスを担当しています。最近の医学部では挨拶の仕方から教えるコミュニケーション力の講義があるそうです。就職に必要なのは学問ではなく、コミュニケーション力と考える大学も増えていると聞きます。私も数カ月ですが、滞在した議論好きなユダヤ人の国から帰国して就職した時、つくづく自分の思いが相手に伝わらないことにイライラした時期があります。日本特有の「以心伝心」の社会が、実は相手に全く通じてはおらず、それなら言葉を尽くして自分の思いを説明しようとする「はっきり言うこと」を煙たがられ、嫌がられ、疎まれる社会だと感じました。実際、自分の考えを100%相手に理解してもらうのは無理です。それはお互い様、他者と自分の考えが違うのも当たり前、それをよしとして楽しめるほどの余裕があって、初めて他者との関係が楽しめると思えた時に、イライラも解消した経験があります。ましてや社会経験が少なく、家から

学校までの往復という生きている世界もまだ小さい高校生が、他者と関われないのは当然だと思えます。むしろ関われないことを自分の問題と感じている人はいろいろなことを考え、感じる力があるように思えます。

ハイキングでの出来事

さて、この前期には私の大嫌いな行事も数回ありました。5月初めの行事であるハイキングは、私の右足の親指の爪が半分欠けて、歩くのも痛い時でした。「こんな年齢になってなんで学校行事なんだ、嫌だよ～」と駄々をこねてみる私に、教師歴の長い友人が「1度行けば慣れる」というメールをくれました。それほど私にとって大きな挑戦でした。クラスに虫が嫌いという男子生徒がいました。私もまだよくわからない生徒たちとの関係をさぐりながら、なんとかハイキングを過ごしていましたが、最後の最後で炎天下のアスファルトの上に1匹のヤスデを見つけました。足の多い、気持ち悪い虫です。動かないのもう死んでいるのかな、と話していた時、1人の男子生徒が枯れ枝を見つけてきて、それをお箸のように使って、その虫を挟んで草むらに連れ出そうとしました。それを虫の嫌いな生徒も手伝ったのです。なんとか草むらに移動させることに成功しましたが、その虫のその後はわかりません。ただ、ハイキングの感想に虫嫌いの生徒が「虫を助けた」と書き、大きな虫の絵も描いていました。私が「虫、大丈夫になった？」と訊くと「いいえ」と答えながら、彼のはにかんだ顔が優しくなっていました。この生徒の心に何か大きな変化があったことは間違いありません。命の危機にある虫への思い、他の人と力を合わせることで生まれた仲間意識、そして成功体験。私はこんなささやかな出来事をその場で共有できただけで、このハイキングと一緒に行ってよかったなあと思えました。私自身も一つ苦手意識が消えました。助けたいと思って行った学校で逆に生徒たちから助けられる、そんな体験でした。

「この小さな美しい聖堂」

今年は私にとって本当に辛い年回りで、大切な人が相次いで亡くなります。特に5月末からの1カ月間に3人も亡くなって、直後に私の誕生日を迎え、いつもお祝いしてくれた人たちがいなくなったことを実感し、とても辛くなりました。しかし、この世を去る人たちは贈り物も遺してくれています。今日の表題の「この小さな美しい聖堂」という言葉は、イタリア人のカルメル会修道士のお言葉です。私は生前の彼とは全く面識がないのですが、彼を信仰の父と慕う友人が私にこう書いてきました。「神父様は亡くなる前に病院のスタッフに対して『この小さな美しい聖堂をありがとうございます』と感謝なさったそうです。病室は神父様にとって神様の住まいであり、最後の最後まで神父様は宣教師であった、修道士として修道院で最期を迎えることはできなかったけれど、病室を聖堂だと思って感謝して過ごしておられた宣教師にとって、派遣される場がいつもどこでも神様の居場所であり、修道院であり、布教の場なのだということを、慈父は自分たち後輩に教えてくださったと思う」。

私は「この小さな美しい聖堂」は彼自身のことではないかと思えました。実は先ほど一緒に賛美した『讚美歌21』475番は『讚美歌I編』352番の時は「いのちをあたうる主よ、とどまりてわれらのこころをとこ宮となし」と歌われていました。神がとどまってくださることによって私たちの心は永遠の聖堂になる、という意味です。神が造られた体は、人生を過ごして年老い、病も得てボロボロになったけれど、それ

でも今も「美しい聖堂」。私は神によって造られたと知り、今までの自分本位な生き方から、新たに神の願いを自分の生き方としたいと決心し、神の御言葉を自分の言葉として話し、生きていきたいと願うのに、時として相手に誤解されたり通じなかったり、思いのほか、相手が傷ついたりということがよくあります。失敗も繰り返しながら、なお生きていく。心身ともに傷つき、決して楽しいことばかりでもない人生を、精一杯生きていきながらボロボロになっていきます。見た目は美しくないけれど、神によって美しくしていただける聖堂を私は神から託されている。神にすっかりお返しする日には泥んこまみれだと思いますが、「お父さん、ただ今、なすべき勤めを果たしてきました!」と元気よく挨拶できるような生き方がしたい。すでに神の元に帰っていった大事な人たちも私を待っていてくれる。そう信じて歩む日々でありたいと思います。

2017年7月26日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録